

天理図書館蔵『定家家隆調合』の書入れ注について

—付翻刻—

寺島恒世

要旨 新編国歌大観所収『定家家隆両卿撰歌合』の底本となった天理大学附属天理図書館蔵の『定家家隆調合』（九一一・二九一―イ）は、良質な本文とともに、書入れの注を有することで注意される伝本である。部分的に加えられた注釈内容を検討すると、この書入れ注は、大きく二系統に分かれる付注本のうち、同系統本に属する「為家」注とされるものと重なる部分が多く、その注釈との関わりを想定することが可能である。ところが先年、本書の解題と翻刻が公表され、右のように判断した拙稿の見解に対して異議が唱えられた。その根拠は明らかではなく、説明なきままに徒に時間が経過する不都合に鑑みて、先の判断の根拠を示すこととする。また、初めて翻刻されたその本文には過誤が目立つことにより、正しい天理本の現状を紹介すべく本文を翻刻する。

はじめに

新編国歌大観第五卷所収『定家家隆両卿撰歌合』の底本は、天理大学附属天理図書館蔵の『定家家隆謠合』（九一一・二九一イ一）である。この撰歌合は、後鳥羽院が隠岐配流後に藤原定家と藤原家隆の歌それぞれ五〇首を撰び、それらを歌合形式に結番したもので、遠島における後鳥羽院の定家と家隆両者への思惑を窺わせる貴重な資料と認められる。本作の諸本は、先に私に試みた検討によれば、四類に分けることが可能であり、天理図書館蔵本は、第一類本系統第一種本の最善本に位置づけられる貴重な本文である。それゆえ新編国歌大観の底本として採用されることとなった本書は、その解題においても記した通り、十八番から四十一番にかけて書入れの注があることでも注意される伝本であった。その注については、かつて拙論で次のような判断を下した。

天理図書館蔵本については、全歌にわたる注はないものの、余白に書入れの注が見られる。そして、その内容は「為家」注とされるものに重なる部分が多いので、第一種本の他本との関わりが想定される。¹⁾

本作の伝本についてもまた注釈についても、それ以上触れることもないままにうち過ぎて、先年、松井律子氏の「天理大学附属天理図書館蔵『定家家隆謠合』（解題と翻刻）」（『就實語文』第二一号、平成一二年一二月）なる論が公表され、そこに次のような記述がなされた。

天理本の注については『国書総目録』『中世歌合伝本書目』とも注釈本とは記載していない。このことに最初に触れたのは寺島氏であるが、氏は天理本の注は為家注と重なる部分が多く、一種本の他本との関わりが想定されると述べておられる。

筆者の調査では（中略）天理本の注釈が為家注と重複するのは引用歌のみであり、注釈そのものは極めて独自性の高いものである。

本書の書入れ注の注釈内容につき、為家注とされるものと幽齋注とされるものとの比較検討をし、さらに『六家抄』や『拾遺愚草』の古注釈類等、見及ぶ限りの諸注を見比べて判定を下した稿者としては、この記述に少なからず驚かされ、我が目を疑う思いを抱いた。その判断の根拠は「解題」中に見あたらず、納得すべくもないために、早速に私信により筆者の松井氏にその論拠を質すこととした。ところが、それに対する回答は全く要領を得ず、そもそも答える姿勢は伺い得ずに、右の立論が何故なされたのかは遂に理解することができなかった。やむを得ずその後になされると表明された検討の結果を待つこととしたが、然るべき月日を経てもその検討結果は公表されないようであり、事情を知らぬ大方の識者にあらぬ誤解を招かぬよう、あるいは既に抱かれたやも知れぬ誤解を解くべく、ここに本稿は、稿者が先の記述をなしたその根拠を示すこととする。併せて、氏の翻刻には少なからぬ過誤が認められるので、天理本『定家家隆詞合』の正しい本文を紹介するために、私に翻刻させて頂くこととした。

書入れ注について

本書に書き入れられた注は、十八番左の歌から四十一番右の歌までに及ぶ。それらは、歌頭に出典を付し、本文余白に語釈や注釈を書き入れたもので、わずかな語釈や参考歌のみを示すものから、詳しい注釈に及ぶものまで、さまざまである。⁽³⁾最初の十八番左歌を示すと次のようである。

拾遺愚抄に出

いこま山あらしも秋の色にふく手そめの糸のよるそかなしき^{*}

夫木集。

ふほく集。証歌。

河内染の手染の糸の乱れあふてより合へくもみえぬ君かな

* 枕詞。

歌頭に「拾遺愚抄」と出典注記があり、「夫木集」の歌が「証歌」として示され、和歌の第四句目の「手そめの糸の」に、それが「枕詞」だとする語釈が付されている。ただし、この歌には注釈文はなく、為家注との関わりが問題となる注釈は、二十一番右歌以降に付される。

二十一番右

秋かせはさてもや物のかなしきと萩の葉ならぬ夕暮もかな

萩あきの葉ならで外に吹夕暮の秋風物悲しき物歟、かなしからざる物歟。萩の葉より外に吹夕暮の秋風もかなとねがへる也。萩より外の夕暮の秋風でさへ悲しきか試しんとの歌なり。扱あもやは萩の葉ならぬに当りてそふありてもやなり。(下)

古今集に、

我かことくわれを思はん人もしき扱もやうきとよを試みん 是はさありてもや也。

千載集爰注 ありても

みたれすとをわり聞社 もいはひ扱も分れは慰ねども それでもなり。

この「萩あきの葉ならで」以降詳しく施されている注釈を、為家注の、

さてもやはさうてもや也。萩の葉の外に吹てさひしくは萩の科にては有ましきと也。

という簡潔な文章と比較してみる。すると、「さても」の語釈にやや類似する部分（「そふありてもや」「さうてもや」）があるものの、注釈として重なるところは乏しく、両者に関わりを認めることは困難である。次の、二十三番左歌、
はなす、すき草のたもとも朽果ぬなれて別れし秋をこふとて

についての当該注、

人の袖袂になそらへて、なれにし秋にわかれてその夜を恋慕ふとて、花薄の草の袂も朽果たるとよめ

るなり。

草の。古今集三

秋の野、草の袂の花薄穂に出て招く袖とみゆらむ

と、為家注、

秋の野の草のたもとか花す、きはにいて、まねく袖と見ゆらん
す、きのたもと朽はてたるは馴し秋に別しゆへと也。

の両者の関係を調べると、引用歌は同一であり注釈文の趣旨も同じであるが、当該注が人事に引き付ける趣向に焦点を当てていると読めば注釈内容は別ものと判断される。続く二十三番右歌、

草のはにくらせる宵のきりくすあきかせ吹ぬぬしぬねんかたやなき
の当該注、

あきかた、ま、思ひ侘てうちぬる中に見へつる夢をたのめと、今は夢さへうとくなれば、いかにねし
よ夢に見えつると、よいくに枕定めかねぬるとなり。⁽⁵⁾

古今集恋の一に、

よいくに枕さためんかたもなしいかに寝し夜歎夢にみえけん

と、為家注、

よひく／＼に枕さだめむ方もなしいかねし夜か夢に見え劍
草はをやとりとしたる蜚秋風吹みたれていかにねんと也。

の関係も、引用歌の一致を除いては、具体的に開わるところは見いだし難い。さらに、二十四番左歌、うらかせやとはに浪こす浜まつのねにあらはれてなく千とりかな
に対する当該注の、

新勅撰に定家

まつかねの磯辺の浪のうつたへに顛れぬへき袖のうへかな

定家 あらわれぬ

古今集恋三

風吹は浪うつきしの松なれや音根に顛れてなきぬべらなり

という二首のみの掲載と、為家注、

まつかねを磯への浪のうつたへにあらはれぬへきそての上哉

ねにあらはれてとはつよくなく也。序歌のやうにて又浦かせにつよくなきたるやう也。

の関係においても、「まつかねの」の歌は一致するものの、当該注に注釈文は存在しない以上、注釈としての相関はあり得ないということになる。

従つて、初めからこれら四首分の注釈を対照する限りでは、引用歌は同一ながら、当該注が為家注との関わりを有していないと見るのは、いかにも当然の判断であつた。ところが、右の引用で飛ばした二十二番左歌、秋はいぬ夕日かくれのみねのまつ四方の木葉の後もあひみんの当該注、

秋はくれ果て淋しき夕日の峯に残りたる松は秋のかたみとなりて、冬四方の梢の木の葉のちりはてたる後も峯の松をは替らすあひ見るとなり。

＊（頭注） 古文前集二

四時 淵明

陶淵明也

春水満二四沢一

夏雲多二奇峰一

秋月揚明輝

冬嶺秀孤松

を、為家注の注釈文、

冬嶺孤松秀の心也。秋は暮はて、さひしき夕日の嶺に残りたる松、秋の形見也。四方の梢ちりはて、後も此松はかはらすあひみんと也。

と、読み比べてみる。すると、為家注の冒頭の一文「冬嶺孤松秀の心也」は、当該注が頭注に引く陶淵明「四時」の結句を指摘したものであり、続く「秋は暮はて、」以降の為家注の二つの文も、当該注の一文化された文章とほぼ同文とも言える近さを示していることが知られるだろう。こうした、注釈文が両注でほぼ一致する例としては、三十番左歌の、

逢みての後のこゝろをまつしれはつれなしとたにえこそうらみね
の当該注、

つらかるへき事を思へは只今つれなきもしゐてはえ恨みじとなり。

拾遺

逢見ての後のこゝろにくらふれはむかしは物を思わさりけり 敦忠

と、為家注、

あひ見ての後の心にくらふれはむかしは物もおもはさりけり

あひみて後つらかるへき事を思へはた、いまつれなきもしゐてはえうらみぬと也。

を挙げる事ができる。これは歌と注釈文の順序が逆となり、為家注の最初の「あひみて後」(波線部)を欠くのみで、当該注は為家注とほぼ同文となっている。

また、二十七番右歌、

さえのほる越※の白根高の冬の月ゆきはこほりのふもとなりけり

の当該注、

月かけも大そらにさへ上りて越の高根を照せば、ふり積りたる雪は高根の月の下に見ゆる故、雪は月の水のみもととなりけりとよめる事なり。

た、のこほりは雪の下なり。月の氷は雪の上なり。

* 越前越後。

は、簡略な為家注の全文、

た、の氷は雪の下也。月の氷のみ雪のうへ也。

をそのまま引き、その前に別の注釈を加えた形となっている。ちなみに、この別注は幽齋注とされるものの後半と類似する本文内容である。^①

逆に、三十五番左歌、

芦の屋にはたるやまかふ蟹やおくおもひもこひも夜はもえつ、

の当該注、

晴る、夜の星か川辺の蛸かも我住かたの蟹のたく火敷

此歌はあし屋の里にてよめる哥也。

^{本文} 我思ひも我こほる心の恋も夜はもへつ、もゆるは、我胸があしの屋になりて蟹も火をたき蛸も蟹のいさり火にまかふ様にかとなり。

と、為家注、

はる、夜の星か河辺のほたるかも我すむかたのあまのたく火か

思ひこひ、いづれも火によそへてよみならはせり。我胸のよるくもゆるはもし胸かあしやのなたに
なりてあまもたき螢もまかふかと也。芦の屋にのに文字ふしきの事也。のといへはた、螢火はかり也。
にもしにて我胸さながらあしのやに成たるかと云心あり。よくく工夫すへきとぞ。

の関係のように、当該注が為家注の一部（破線部）を省くケースもある。このように当該注のほうが簡略な例は先の三十番左の例にも見られたものの、全体としては極めて乏しく、これらの事例は例外的なものである。すなわち、文言の近さはもとより、注釈内容として近い関係を見いだせる多くの事例のほとんどは、為家注を踏まえて詳述する形を取るのである。⁽⁸⁾ 幾つかの例を見てみよう。

二十七番左

小泊瀬やみねのときは木吹しほりあらしにくもる雪の山もと

当該注 常磐木は落葉せぬ故に雪いたく積る物也。其つもれる雪□あらしの吹をろせは雪の山もとは曇る様に見ゆるとなり。

為家注 常磐木には雪おほく積る也。それを吹おろして曇と也。

三十二番左

おもかけはをしへし宿にさき立てこたへぬかせのまつにくこゑ

〔当該注〕

逢見し人、箇様くゝの所に住居と云教へ置しを思ひて、其教られたる佛を知るへしとして尋れば、答る物は無くて松の声はかりとなり。

箇様の様子に聞しなと思ひ出るを云ふ。

古今恋上

知るしらす何かあやなくわきていわん思ひのみ社知るへなりけり

答ふるものはなくて松にのみ吹風の声斗りとなり。⁽⁹⁾

〔為家注〕

しるしらすなにかあやなく分ていはむおもひのみこそしるへなりけれどもとみし人の、我はかゝる所に住など、そこはかとなくをしへ捨しを、おもひあまりて面かけをしるへとして尋れば、こたふる人もなくてたゝ松風のみ吹たると也。

四十番左

こゝろをはつらきものとて別れにし世々の佛なにしたふらん

〔当該注〕

契つる人のこゝろをつらしと思ひて別れなから、世々へてのち其別れし人の佛を思ひいて、なに慕ふらんとなり。⁽¹⁰⁾

為家注 人のこゝろをつらしとて別て、そのおもかけをなとしたふと也。

四十一番右

なにとなく我ゆへぬれし袖のうへをあさかりけりと月やみるらむ

当該注 なにとなく物思ひしてぬらせし袖のうへの涙なれば、月故に感を生して涙なみだを落したるならず。されは

月もみる人の心をあさかりけりと見ゆらんと也。⁽¹⁾

為家注 月故はおちぬ涙なれば月のかんはなき也。さる程に月や浅しとみるらんと也。

これらの例はいずれも為家注の簡略な内容を踏まえて詳しく述べる形を取っている。

なお、三十四番右歌、

とこはうみまくらは山となりぬへし涙もちりもつもるうらみに

の当該注は、

なみたつもりて床は海となり、ちりつもりて枕は山の如くなるとす。よがれの数そふ故にとなげきたる也。本歌のむねと袖とをとこと枕にとりなしたる也。

詞花集に、

胸はふじ袖は清見か関なれや煙も浪も立ぬ日ぞなき

秘哥なり。

という内容である。松井氏が比較の対照にしている為家注は安井久善氏蔵本と松平島原文庫本で、いずれも寛文年間（八年・十年両版あり）の版本であり、ここでは詞花集の歌のみの引用であるが、延宝四年版本では、

涙は海塵は山とならんと也。胸はふし袖は清見の類也。

とあり、当該注の本文はその極めて簡略な為家注を詳しく述べた形となっている。また、四十一番左歌、夜もすから月にうれへて音をそなくいのちにむかふものおもふとて

当該注

月を独見るは短命の人相ありといふ事なり。故に月にうれへとは月をうらみたる也。こゝろは夜もすから月をうらみて音を鳴は、月に向ふは命みしかきが物思ひすとてなり。

亦一説に、夜もすから月に向ひてうれへねをなくは、月にいのちをめせと物思ひしてとなり。⁽¹²⁾

為家注

月を独みるは短命の相と也。つきにうれへとは月を恨たる也。一説月に命をめせと向ひたるともいへり。

を見れば、為家注の二説をいずれも踏まえた形となっている。

以上のような、注本文全体にわたって近さを認めることができるもののほかに、為家注を詳述した形をとり、その後別注を付加した注釈も見られる。例えば、二十五番左歌、

志賀のうらや氷もうすぐ居る零ちの霜のうは毛に雪はふりつ、
についての両注を見ると、

当該注

此歌は、志賀の浦の寒き躰のみを見立て詠る也。扱氷のむすふを氷のいるといへば、志賀の浦や氷も居るとい、かけてたづの居る事よみなしたり。其たづの下の如く白きうはげに雪のふりつ、降か、るを見て被詠るなり。甚物寒き躰なり。霜のうはげは霜の置たる上にまた雪の降かか、ると見る節もあるなり。⁽¹³⁾

詞花集の春の巻頭の□

氷ひし志賀のからさきうち解てさ、波寄する春風そふく

為家注

只さむき躰の哥也。氷ぬし志賀のからさきと有。ゐるといふ字両用也。

となつており、当該注の前半は簡略な為家注を詳述し、さらに別注として、「霜のうはげ」につき霜の上に雪の降る様をも併せ見る立場の説を紹介している。

もとより、内容に踏み込んで関わりを認定することは、解釈を伴うゆえに、判定には微妙なところがある。例えば、三十九番左歌、

たれもこのあはれみしかき玉*の緒のなかくはものをおもはずもかな

当該注

誰も夜に往程は幾程もなく短くて物思ひをすれば、玉の緒の長くもありて物を思はずもがなとよめる

なり。⁽¹⁴⁾

いくよしもあらし我身をなそもかく蟹の刈る藻に思ひ乱る、

*命の事なり。

為家注

いく世しもあらしわか身をなそもかくあまのかるもにおもひみたる、の類也。いく程もなき世に物を思はてをくりたきと也。

のような例は、踏まえる歌が同一で、注釈の簡略な言葉が重なるゆえに関係性を指摘されやすいケースかとも見られるが、為家注は残り少ない人生への物思いを詠む雑歌としての解を提示するのに対して、当該注は明らかに恋の歌として解しているので、注釈としては別のものと判定される。また、四十番歌右歌、

筑波山やまもあせねと吹風に人のこゝろのひまそつきなわき

当該注

筑波山は繁り合て風いたく吹とも色替りあせ行ねは、人のこゝろはひま有がつれなきと也。心のひまとは心のたへまなり。ひまはすきまの事なり。故に人の心のひまは人を忘る、たへま有事なり。⁽¹⁵⁾

新古今

筑波山はやましげ山しげければ思ひ入にはさわらざりけり⁽¹⁶⁾

*色替りあれ行事也。あれる事。絶える。

為家注

つくは山はやま茂山しけ、れと思ひ入にはさはらざりけり

茂きつくは山さへあする程吹風に人のこゝろはひまもなきと也。

についても引用歌は一致するものの、為家注は草木が繁る筑波山さえ荒らす程に吹く強風によって人の心には隙間もないと解するのに対して、当該注は強風によっても変わらぬ（隙間のない）筑波山とは対照的に人の心には隙間があるのが厭わしいと解しており、注釈内容は別のものと判断される。

以上をまとめると、次の通りとなる。

十八番左 注なし

歌一致

二十番右 注なし

歌一致

二十一番左 前半類似

二十一番右 別注

二十二番左 ほぼ一致

二十三番左 別注

歌一致

二十三番右 別注

歌一致

二十四番左 別注

歌一致

二十四番右 踏まえて詳述

二十五番左 前半踏まえて詳述・後半別注

- | | | |
|-------|------------------|-----|
| 二十五番右 | 踏まえて詳述 | 歌一致 |
| 二十六番左 | 別注 | 歌一致 |
| 二十六番右 | 踏まえて詳述 | |
| 二十七番左 | 踏まえて詳述 | |
| 二十七番右 | ほぼ一致・別注付加（幽斎注類似） | |
| 二十八番左 | 踏まえて詳述 | |
| 二十八番右 | 踏まえて詳述 | 歌一致 |
| 二十九番左 | 踏まえて詳述 | |
| 二十九番右 | 踏まえて詳述・別注付加 | |
| 三十番左 | ほぼ一致 | 歌一致 |
| 三十番右 | 部分的に一致 | |
| 三十一番左 | 注なし | 歌一致 |
| 三十一番右 | 別注 | |
| 三十二番左 | 踏まえて詳述 | 歌一致 |
| 三十三番左 | 注なし | 歌一致 |
| 三十三番右 | 前半類似・後半別注 | |
| 三十四番左 | 踏まえて詳述 | 歌一致 |
| 三十四番右 | 踏まえて詳述 | 歌一致 |

三十五番左 ほぼ一致・一部省略

三十五番右 ほぼ一致・語釈付加

三十六番左 踏まえて詳述

三十六番右 踏まえて詳述

三十七番左 踏まえて詳述・別注付加

三十七番右 踏まえて詳述

三十八番右 踏まえて詳述

三十九番左 別注

三十九番右 ほぼ一致

四十番左 踏まえて詳述

四十番右 別注

四十一番左 踏まえて詳述（二説とも）

四十一番右 踏まえて詳述

歌一致

歌一致

歌一致

これら四一首に及ぶ注釈につき、注釈文がほぼ一致するもの六例、踏まえて詳述する形を取るもの二〇例、別注であるもの八例という結果である。ちなみに注釈文のないものが四例、引用歌が一致するものは一七首となる。それらに部分的な一致・類似等三例を勘案し、得られたデータを総合的に判断して、先の拙稿では当該注は為家注と「重なる部分が多い」と記述した。

従って、今後本注釈の性格を考えていくには、為家注と重なる基調構造であることを踏まえ、別注を含む注釈内容を検討することが必要となるであろう。

〔注〕

(1) 「定家家隆両卿撰歌合」考」「山形大学紀要(人文科学)」第一〇巻第二号、昭和五八年一月。

(2) 「為家注」とは先の拙稿でも述べた通り、実際に藤原為家のものとは認められないので、「為家注」とすべきであるが、煩雑さを避けて本稿ではすべて括弧をはずして表記する。「幽斎注」についても同様である。なお、為家注は延宝四年林左兵衛版本(筑波大学附属中央図書館蔵本)、幽斎注は『歌合部類』所収本(国会図書館蔵本)によった。

(3) ほかに一語の語釈のみ記す例が十二番・十四番各左歌に認められ、九番右歌には異本歌が示される。

(4) 松井氏の当該注翻刻は第三文最後の「歌なり」を「歎なり」とするが不審。

(5) 松井氏翻刻は冒頭の「あきかた、ま、」を「あひかたま」とするが不審。

(6) 松井氏の当該注翻刻は末尾部分の「替らすあひ見るとなり」を「契らすあひ見るとなり」とするが不審。

(7) 幽斎注の後半部は以下の通りである。「こしのしらねは白山の嶽の名なり。高山にて常住雪のあるやまなれは麓の水は治定なり。それをいひかへて、月さへのほり全体氷のことくなれば、しらねの峯の雪も氷のふもと、

なれるといへり。月の水をいふ也。」

(8) 為家注と当該注の先後関係は厳密には明らかではない。従つてもし当該注が為家注より先に成立したものであれば、為家注が当該注を抄出したことになるが、ここでは関係をわかりやすく把握するために、為家注を先行するものと仮定して論を進める。

(9) 松井氏翻刻は注第一文末尾近くの「答る物は無く」を「しる物は無く」とし、最終文冒頭の「答ふるもの」を「しるもの」とするが不審。また第一文末尾の「声はかりとなり」を「声はかり聞となり」とするものも不審。

(10) 松井氏翻刻は冒頭の「契つる」を「かわりつる」とするが不審。

(11) 松井氏翻刻は第二文冒頭の「されは」を「さ程は」とするが不審。

(12) 松井氏翻刻は最終文冒頭の「亦一説」を「亦説」とし、最後の「なり」を「あり」とするが不審。

(13) 松井氏翻刻は第二文冒頭の「扱水の」を「雨水の」とし、第四文冒頭の「甚物寒き」を「其物寒き」とするが不審。

(14) 松井氏翻刻は冒頭の「誰も夜に往程は幾程もなく」を「誰も夜に侘ねは成程もなく」とするが不審。

(15) 松井氏翻刻は第一文の「色替りあせ行^ねは」を、「色替りあせ行なは」とする。^ねには底本に虫損があり、残存部分から推定すれば「ね」と解される。なお文脈上も「ね」でなければ意味が通じない。

(16) 松井氏翻刻は結句「さわらさりけり」を「さわさりけり」とするが不審。

〔補〕松井氏翻刻の不審箇所は右の指摘に留まらないが、書入れ注はその性格上小字である上、読みにくい筆跡が多いので、誤読もやむを得ないところがある。ただし、和歌本文及び番数左右・合点等は大字で、それほど読みにくいものはない。以下にその部分における誤りを指摘する。

番数	箇所	誤	正
十番右	第三句	立て、	立て
十八番右	結句	川きり	川霧
二十七番	右	(脱落)	右
二十七番右	初句	さへのほる	さえのほる
三十番右	初句	無名	無 <small>き</small> 名
三十三番左	歌頭	(脱落)	＼(合点)
三十三番右	第二句	浅草	浅茅
三十七番左	初句	忘すれすは	わすれすは
四十一番右	初句	なにとなけ	なにとなく
四十四番左	結句	よと、め	よとめ
四十五番左	結句	鳴く	なく
四十五番右	第四句	みへこし	みえこし

敢えて掲出するのは、新編国歌大観所収本の本文の信用性と関わるからである。当該本文作成者としては傍迷惑なことだが、何より原典本文に対する冒瀆は許されまい。

〔翻刻〕

以下の本文は、天理大学附属天理図書館蔵『定家家隆譚合』（九一一・二九―イ二）を翻刻したものである（天理大学附属天理図書館本翻刻 第一〇五二号）。

凡例

- ・一首二行書きの和歌本文は一行書きで表した。
- ・漢字の旧字体・異体字はすべて通行の字体に統一した。ただし、躰はそのままとし、歌・哥・譚は区別して示した。
- ・歌頭に付される朱の合点は、\の記号で示した。
- ・書入れ注は原文は小字であるが、和歌本文と同じ大きさで示し、適宜句読点を付した。
- ・書入れ注の文章にまみえられる濁点は、そのまま示した。従って清濁はすべて原文通りである。
- ・書入れ注の出典注記は歌頭に、行間の注記はすべて歌の次に示し、上部余白の注については、その位置に※印を付して注釈文の後に示した。
- ・書入れの語釈も※印を付し、注記の後に示した。なお、上部余白の注と語釈をともに有する場合は、※印に番号を付して区別した。
- ・判読が不可能な文字は□で示し、部分的な残存等で推定可能な場合のみ、推定される文字を□で囲んで示

した。

・後筆とおぼしきルビ・傍記・送り仮名・見セ消子等もすべてそのまま示した。

翻刻本文

定家家隆詞合 一名撰五十番哥合

御点 後鳥羽院

一番

左

里の蛸の汐焼衣たちわかれなれもしらぬ春のかりかね

中納言定家

右

春もいまた色にはいてすむさし野やわかむらさきの雪のした草

従二位家隆

二番

左

さくらかり霞のしたにけふ暮ぬ一夜宿かせはるの山もり

右

このほとは折られぬ雲そかゝるらんとつねもゆかし山のさくら木

三番

左

はなの色に一はるまけて帰雁ことし越路の空たのめして

右

さくらはな開ぬる時はかつらきの山のすかたにかゝるしら雲

四番

左

名もしるし岑のあらしも雪とふる山さくら戸のあけほの、空

右

けさみれは木すゑの花は散にけりかせのしたなる庭のしら雪

五番

左

名取川春の日はあらはれてはなにそしつむせゝの埋木

右

高砂の山には花やみつしほのあらはにみゆるまつの葉もなし

六番

左

踏したく浅香のぬまの夏草もにかつ乱れ行しのふもちすり

右

あし鴨の跡もさはかぬ水の江のなをすみかたく春やゆくらむ

七番

左

鳴ぬなり木綿附とりのしたり尾のをのれにも似ぬ夜半のみしかさ

右

秋はまた遠山とりのしたり尾にあまりておしき晨明の月

八番

左

葦の屋のかり寝のとこのふしの間のみしかくあくる夏の夜なく

右

三島江の鳩にホのうき巢も乱芦のすゑ葉にかゝる五月雨のころ

九番

左

打靡ちんひくくしけみかしたのさゆりサはのしられぬほとにかよふ秋かせ

右 かせそよくならの小川の夕暮は御祓そ夏のしるしなりけり 異本に此哥有

烏羽玉のやみのうつゝの鶺鴒つばきふね月のさかりや夢もみるへき

十番

左

秋とたに吹あへぬかせに色かはるいくたのもりの露のした草

右

軒ちかき山の下萩こゑ立て夕日かくれはあきかせそ吹

十一番

左

須磨の蟹の馴にし袖もしほたれぬせき吹こゆるあきのうらかせ

右

秋かせに山のはわたるむら雨をことそともなくいつる月かけ

十二番

左

等閑※の小野の浅茅に置つゆもくさ葉にあまる秋の夕暮

※さまでもなきにの。

右

はなも葉ももろく散行萩か枝にむら雨かゝるあきのゆふくれ

十三番

左

浅茅生の小野の篠はら打なひきをちかた人に秋かせそふく

右

露はらふ袖吹かへすあきかせにうらさへ萩の色そうつろふ

十四番

左

移り行はなの千種に乱れつゝかせのうへなる宮城野の露

※深き野なり。陸奥の名所。

右

又やみんまたやみさらんしら露のたまをきしける秋萩のはな

十五番

左

なかめつゝおもひし事のかすくにむなしきそらの秋のよの月

右

暮ぬ間に山のは遠くなりけりそらよりいつる秋の夜の月

十六番

左

むかしたになをふる郷の秋の月しらすひかりの幾めぐりとも

右

あり明の月のかつらのもみちはをみねにのこして小鹿鳴なり

十七番

左

川かせに夜わたる月のさむければ八十うち人もころも打なり

右

吹けあらし雲の衣のきぬくはつきにおしまぬ明かた有明のそら

るる

十八番

左

拾遺愚抄に出

いこま山あらしも秋の色にふく手そめの糸のよるそかなしき^{*}

夫木集。

ふぼく集。証歌。

河内染の手染の糸の乱れあふてより合へくもみえぬ君かな

※ 枕詞。

右

続後撰秋の中に

あさ日さすたかねのみゆき空霽はらてたちもおよはぬふしの川霧

十九番

左

続後撰秋上

高砂の外にも秋はあるものをわか夕暮と鹿は鳴なり

右

続古今集秋下

天川あきの一夜のちきりたに交野に鹿の音をや鳴らん

*河内国。難きとかけて。

二十番

左

玉葉集秋下

夕月日むかひの岡の薄もみちまたきさひしき秋の色かな

*むさし。

右

新拾遺秋下に

さ^をしかの夜半の草ふし明ぬれと^かへる山なきむさし野のはら

古今集

明ぬとて野辺より山へ入鹿のあと吹送る萩下風

廿一番

左

続後撰秋下に

をくら山しくる、ころの朝な／＼きのふはうすき四方のもみち葉

小倉山は定家卿の常／＼在せる処なり。

右

続古今集秋の上に

秋かせはさてもや物のかなしきと萩の葉ならぬ夕暮もかな

萩の葉ならで外に吹夕暮の秋風物悲しき物歎、かなしからさる物歎。萩の葉より外に吹夕暮の秋風もかなとねがへる也。萩より外の夕暮の秋風でさへ悲しきか試んとの歌なり。扱もやは萩の葉ならぬに当りてそふありてもやなり。

古今集に、

我がことくわれを思はん人もしき扱もやうきとよを試みん 是はさありてもや也。

千載集爰注 ありても、

みたれすとをわり聞社 もいはひ扱も分れは慰ねども それてもなり。

廿二番

左

拾遺愚抄に

秋はいぬ夕日かくれのみねのまつ四方の木葉の後もあひみん

* 秋はくれ果て淋しき夕日の峯に残りたる松は秋のかたみとなりて、冬四方の梢の木の葉のちりはてた

る後も峯の松をは替らすあひ見るとなり。

※ 古文前集二

四時 淵明 陶淵明也

春水満 四沢

夏雲多 奇峰

秋月揚明輝

冬嶺秀孤松

右

家隆集に

神代よりをくらの山の紅葉、は下てる姫やそめはしめけん

廿三番

左

新統古今集に

はなす、き草のたもとも朽果ぬなれて別れし秋をこふとて

人の袖袂になぞらへて、なれにし秋にわかれてその夜を恋慕ふとて、花薄の草の袂も朽果たるとよめるなり。

草の。古今集三

秋の野、草の袂の花薄穂に出て招く袖とみゆらむ

家隆秋

右

草のはにくらせる宵のきりくすあきかせ吹ぬぬねんぬかたやなき

あきかた、まゝ思ひ侘てうちぬる中に見へつる夢をたのめと、今は夢さへうとくなれば、いかにねしよ夢に見えつると、よいくくに枕定めかねぬるとなり。

古今集恋の一に、

よいくくに枕さためんかたもなしいかに寝し夜歎夢にみえけん

廿四番

左

続後選冬

うらかせやとはに浪こす浜まつのねにあらはれてなく千とりかな

新勅撰に定家

まつかねの磯辺の浪のうつたへに顕れぬへき袖のうへかな

定家 あらわれぬ

古今集恋三

風吹は浪うつきしの松なれや音ねに顕れてなきぬべらなり

右

家隆集

夜やさむき里は雲井の木からしにこゑさへうすくころも打なり

雲井ははるかなるといわん為なり。此哥、雲井のはるかなる里も木枯の吹時分は夜や寒からん、それ故に衣うつなり、されど雲井のはるかなる里なれば、其衣うつ音も聞へ兼れば声さへ薄くと読る也。

廿五番

左

拾遺愚抄中

志賀のうらや氷もうすく居る零の霜のうは毛に雪はふりつ、

此哥は、志賀の浦の寒き躰のみを見立て詠る也。扱氷のむすふを氷のいるといへば、志賀の浦や氷も居るとい、かけてたづの居る事よみなしたり。其たづの下の如く白きうはけに雪のふりつ、降か、るを見て被詠るなり。甚物寒き躰なり。霜のうはげは霜の置たる上にまた雪の降か、ると見る節もあるなり。

詞花集の春の巻頭の□

水ひし志賀のからさきうち解てさ、波寄する春風そふく

右

家隆集下

芦辺行鴨の羽かひの夕しもを余所にはなかぬさ夜ちとりかな

新勅撰羈旅 あし辺行鴨の羽かひに霜ふりて寒き夕の事をしそ思ふ

此歌万葉集の一に出。万葉には、下の句寒き夕に大和しそ思ふとあり。

羽がいは左右の羽ねを交へたる事なれば鴨の脊を云ふ。
此歌のこゝろは、あし辺行鴨の脊の夕霜を千鳥は己か脊のうへにをきてわびてなくとなり。

廿六番

左

拾遺愚抄下

雪折の竹のした道跡もなし荒にしのちの深草のさと

※

深草の里に住侍りて京へ詣ふてくとてそこなりける人によんでをくりける 業平
としを経て住こし郷を出ていなはいと、深草野とやなりなん

伊勢物語百廿三にも。是は後に有。[↑]かへすとも、雲の衣もの引哥也。

いとせめて恋しき時は烏羽玉の夜の衣をかへしてそぬる きるとも有。

※竹の多き郷なり。六百年もあれにしと業平よめる故に、定家卿亦あれにしのと。荒にしは、深草の郷五百年経たる時荒にしと詠る、夫より六百年も経る故にのちの深草とは詠りし。

右

家隆集

かへすとも雲のころもはうらもあらし一夜ゆめかせ岑の木からし

是よりの故事。衣を返すは、

万葉に、

白妙の袖折返しこをればかいか姿の夢にしみゆる

廿七番

此歌より袖を返してぬれば思ふ人を夢に見るといふ事なれば、衣を返してぬるともいふ也。
山の高根に旅寝をしたれば雲をかたきたるなり。されは故郷を夢に見たく思へども雲の衣は裡も有
ましければ返す共せんなし。せめて一夜の夢をはこがらしの驚かさすとも見させよと木枯に云かけた
る歌也。

左

続古今の冬

小泊瀬ハツやみねのときは木吹しほりあらしにくもる雪の山もと

常磐ツツ木は落葉せぬ故に雪いたく積る物也。其つもれる雪ツツあらしの吹をろせは雪の山もとは曇る様に
見ゆるとなり。

右

家隆集

さえのほる越ツツの白根高の冬の月ゆきはこほりのふもとなりけり

月かけも大そらにさへ上りて越ツツの高根を照せは、ふり積りたる雪は高根の月の下に見ゆる故、雪は月
の氷のふもとなりけりとよめる事なり。

たゝのこほりは雪の下なり。月の氷は雪の上なり。

※ 越前越後。

廿八番

左

拾遺愚抄上

白妙にたな引雲を吹ませてゆき※に天きるみねのまつかせ

峯の雲も松に降かゝる雪も白き故に吹交てと読るなり。松風の吹ちらす故に嶺には雪のあまきるとなり。

※左右へはらくふる事也。

右

家隆集

高砂の尾上の鹿の鳴ぬ日もつもりはてぬるまつのしら雪

秋は鹿の夜なく鳴を聞と冬は鹿も鳴事稀なり。鳴ぬ日をいつ歟とまつにかけてよめる。

鹿の鳴ぬ日数もつもりて松の雪もいよく冬深くなれば、つもり果たると詠るなり。

拾遺の秋 題しらす

秋風の打吹ことに高砂の尾上の鹿の鳴ぬ日そなき

廿九番

左

続拾遺恋の中

しられしな千入草の木の葉くさこかるとも時雨あめる、雲に色しみえねは

木々の葉の千種ちかたに色つきこかる、が如く、我思ひの色にや出んと歎く故に、能く物の理りを思へは、

家隆集

右

時雨に木の葉色つくも元よりしくれの雲には色もなしよりしくれの雲には色もなし。木の葉の色つくは木の葉の心からより色付なれは、我も一生涯色には出さしとは思へ人は人には知られしとなり。

※あかくこげる也。

霜かるる人の心のあさは野にたつみは小菅根スゲさへイウラかかれめや

浅は野は信濃なり。亦武蔵ともいへり。

万シニヨミ葉に、

浅はのにたつ身はこすけ根かくれて誰故にかは我恋さらん

三三わ小すけとははかなき事をいふ。人の心も浅く霜枯る、野、ことくちきりもかるれと、はかなき我身はこすけのことく根はかれしとよめり。

はかなき物ならずば契る人の心浅く、枯なはこなたもまたはり合てあたになすへきなれと、さはなくて心の中にはすがの根のかれぬ如く少しもわすれしとなり。

新拾遺春の上に 後久ゴキウ我大政大臣

春雨に降替りゆくあさはのにたつ身は小すけ色もつれなし

夫木集に 為家

浅は野にたつ身はこすけしき絶て枕にしても一夜明しつ

拾遺愚抄上

左

逢みての後のこゝろをまつしれはつれなしとたにえこそうらみね

つらかるへき事を思へは只今つれなきもしゐてはえ恨みじとなり。

拾遺

逢見ての後のこゝろにくらふれはむかしは物を思わさりけり 敦忠

右

家隆集

無^へ名のみゆふ附鳥のあふさかにすてられてたに音をもなかはや

あ□ざるこひのあふとのみなき名に云はるれは、逢坂にてはらへ捨られたる鶉の如く音を鳴^{ナカ}はやとなり。

卅一番

左

拾遺愚抄下

露^{しく}霰した草かけて守^ル山の色かすならぬそてをみせはや

古今下

白露もしくれもいたく守山は下葉残らす色付にけり 貫之

右

玉葉集恋四

泣こふる袖にはいか、やとすへきくもりならはぬ秋の夜の月

月はもとより曇らぬ物なれば、我袖へ宿すとなみたに曇故に如何宿すへきと読り。

卅二番

左

新後撰恋三

おもかけはをしへし宿にさき立てこたへぬかせのまつに吹こゑ

逢見し人、筒様くゝの所に住居と云教へ置しを思ひて、其教られたる佛を知るへしとして尋れば、答る物は無くて松の声はかりとなり。

筒様の様子に聞しなと思ひ出るを云ふ。

古今恋上

知るしらす何かあやなくわきていわん思ひのみ社知るへなりけり

答ふるものではなくて松にのみ吹風の声斗りとなり。

右

続古今恋上

くもれけふ入逢のかねも程遠したのめて帰るはるのあけほの

卅三番

左

統後撰恋二

常住よしもに吹上トコトの浜のしほかせになひく真砂※²のくたけてそ思ふ

※¹ 拾遺恋三 題不知 躬恒

かのをかにしは刈※³をのこなはをなみねるやねるそのくたけそ思ふ

※¹ むかしはよとともとよむ。

※² 紀州。

※³ 古かはらの様成もの。

右

家隆集

時過て小野の浅茅イラスに立けふりしりぬや今もおもひありとは

春過てをの、浅茅を焼煙イラスの立如く、思ふ人に捨られての後も、思ひの煙悔る斗りにこかる、をしらすやとなり。

三十四番

左

拾遺愚抄

すみの江のまつツのねたくやよる浪のよるとはななく夢をたにみて

我思ふ人の思ふ儘になひかねば夜は其人をねたましく思ひてなげきあかし、寝られねば夢をさへ見す

とよめる也。住の江は松と呼出す為なり。松は根と呼出す為なり。よる波はよるといはん為に住の江の松とをきたる也。

古今恋の二、

住の江のきしによる浪よるさへや夢の通ひ路人めよくらむ

右

続後集恋四

とこはうみまくらは山となりぬへし涙もちりもつもるうらみに

なみたつもりて床は海となり、ちりつもりて枕は山の如くなるとす。よがれの数そふ故にとなげきたる也。本哥のむねと袖とを、とこと枕にとりなしたる也。

詞花集に、

胸はふじ袖は清見か関なれや煙も浪も立ぬ日ぞなき

秘哥なり。

卅五番

左

続後撰恋四

芦の屋にほたるやまかふ蟹やおくおもひもこひも夜はもえつ、

晴る、夜の星か川辺の蛸かも我住かたの蟹のたく火敷

此歌はあし屋の里にてよめる哥也。

我^本思^文ひも我こほる心の恋も夜はもへつ、もゆるは、我胸があしの屋になりて螢も火をたき、螢も螢の
いさり火にまかふ様にかとなり。

右

家隆集

わかこひはまたすゑおらぬ^{イ出ぬ}はし鷹のよるさへやすくいやはねらる、

鷹をすゑ立つるには、夜居^{すゑ}とて毎夜くすゑる也。其如く我恋はもの思ひに毎夜く安くいねらる、
歟、いねられぬと也。鷹のとまり木をはこひといふ。

二十六番

左

続後撰恋四

しら玉のをたえのはしの名もつらしくたけておつる袖のなみたに^{*}

をたへのはしは奥州なり。我涙の玉の落るは、玉をつらぬきたるをの切れて玉の乱れ落る様なれば、
我涙よりをだへの橋といふ名を聞さへつらしとよめるなり。

^{*}はらくとをつる。

右

家隆集

なかき日の菅のあら野に刈る草のゆふてもたゆくとけぬきみかな^{*}
^{*}²

^{*}¹ 日の長きに菅のあら野に草刈て幾度もゆひ立ぬれば、手もくたひれたゆく成なり。其ごとく日数を経

て色／＼にいひよれ共、君の心の解ぬ故、口のかたふる、まていふても心解ぬきみかなと読るなり。

※¹ 名よせにも出。 ^{※² 信濃の名所。}

※³ いふてもは草を束ねる事也。夫を口にていふ事にとりなして読るなり。

三十七番

左

新古今恋四

わすれすは馴れし袖もやこほるらん寝ぬ夜のとこのしものさむしろ[※]

此歌、霜寒き夜独寝の床のさむしろに、君が事を思ひ出して涙に袖もこほれば、扱も我思ふ人の我を忘れずあらば、ふたり寝て馴し其袖も我袖のことにこほるらむと思ひやりてよめるなり。下の句の寝ぬ夜の床とはふたり寝ずひとり寝といはんはかりなり。

此歌、六百番の誦合に、俊成卿はん者にて、人の袖をも思ひやれる心優に侍るべし、馴し袖もやと侍る処、凡俗の及ぶまじき事にや、と有なり。

俊成卿の御子なる事を知られすして誉玉へるなり。

※ 小き狭き筵也。

右

新統古今

おもひ川かけみし水のうすこほりかさなる夜半の月もうらめし

古今証哥

三十八番

左

おほそらの月の光りし清ければかけみし水そなを氷りけり
氷の薄き程は月も移りてみへつるに、こほりも夜半のかさなりて厚くなれば月も見へぬなり。其こと
く人をもほのかに見染て其後ちは見えぬ故なり。月のうつろひし氷の夜なく、重りゆくに付て見へぬ
ことくなれば、我人を得見ぬ類ひと思ふ故、重る夜半の月もうらめしと詠る也。

新勅撰に

来ぬ人^{*}をまつほの浦の夕坪にやくやもしほの身もこかれつ、

※小倉百首に□

右

家隆の集

山川のみちにまじる水の泡の色にいてもぬる、そてかな

人のつれなきをなげきてとしを経るまゝに、袖のなみたてついに血の涙になるを、山川の紅葉に交
しる水の泡の如く、色にあらわれて濡る、袖かなと読るなり。

三十九番

左

拾遺愚抄

たれもこのあはれみしかき玉の^{*}緒のなかくはものをおもはずもかな

誰も夜に往程は幾程もなく短くて物思ひをすれば、玉の緒の長くもありて物を思はずもがなとよめるなり。

いくよしもあらし我身をなそもかく蜚の刈る藻に思ひ乱る、
*命の事なり。

右

続後撰恋の二

千早振神農御室ミ廻ノ十寸嘉、味加氣ヲ以久夜乃月乎見留ラ楽ン牟

神の御室は社なり。十寸鏡は神代より榊に鏡をかける習ひなり。故にます鏡かけるとは久しき事をいはんためなり。其ますか、みかけて久しき如く、いく夜の月を見らんとなり。

四十番

左

拾遺愚抄

こ、ろをはつらきものとて別れにし世々の倂なにしたふらん

契つる人のこ、ろをつらしと思ひて別れながら、世々へてのち其別れし人の倂を思ひいて、なに慕ふらんとなり。

右

家隆集

筑波山やまもあせねと吹風に人のこゝろのひまそつきなき^れ

筑波山は繁り合て風いたく吹とも色替りあせ行^ねは、人のこゝろはひま有がつれなきと也。心のひまとは心のたへまなり。ひまはすきまの事なり。故に人の心のひまは人を忘るゝたへま有事なり。

新古今

筑波山はやましげ山しげければ思ひ入にはさわらざりけり

*色替りあれ行事也。あれる事。絶える。

四十一番

左

続後撰恋二

夜もすから月にうれへて音をそなくいのちにむかふものおもふとて

月を独見るは、短命の人相ありといふ事なり。故に月にうれへてとは月をうらみたる也。こゝろは夜もすから月をうらみて音を鳴は、月に向ふは命みしかきが物思ひすとてなり。

亦一説に、夜もすから月に向ひてうれへ、ねをなくは、月にいのちをめせと物思ひしてとなり。

右

なにとなく我ゆへぬれし袖のうへをあさかりけりと月やみるらむ

なにとなく物思ひしてぬらせし袖のうへの涙なれば、月故に感を生して涙^{なみだ}を落したるならず。されは月もみる人の心をあさかりけりと見ゆらんと也。

四十二番

泣涙やしほ八入やしほのころもそれなかなれすはなにの色かしのはん

右

人こゝろなに、つなかん色かはるまさ木のつなのよるもたまらず

四十三番

左

せめておもふ今一度のあふ事はわたらん川やちきりなるへき

右

とこはあれぬいたくな吹そ秋かせの目にみぬ人を夢にたにみん

四十四番

左

命たにあらはあふせをまつら川かへらぬなみもとめとそおもふ

右

萩の葉のすゑ吹なひく秋かせにたまらぬ露のくたけてそおもふ

四十五番

左

やすらひにいてけんかたもしら鳥のとは山まつのねにのみそなく

右

はかなしやみつの浜まつをのつからみえこしゆめの波のかよひち

四十六番

左

わすれ貝夫も思ひのたねたえて人をみぬ目のうらみてそなく

右

思ひ川希なる中になかるめりこれにもわたせかさ、きのはし

四十七番

左

世の中をおもひのきはの忍ふ草いく代の宿とあれは果けん

右

谷川の朽木のはしも埋木の人にしられぬ道やたえなん

四十八番

左

あくる夜のゆふ付とりに立別れうらなみ遠くいつる舟人

右

沖つ浪よする磯辺のうき枕遠さかるなり汐やみつらん

四十九番

左

和哥のうらや評たる朝のみをつくしくちねかひなき名たにのこさて

右

かすか山おとろの道も中たえて身を宇治はしのあきの夕暮

五十番

左

思ふ事むなしき夢のなかそらにたゆともたゆなつらき玉の緒

右

翁さひ人なとかめそ籠のうちにむかしをこふる鶴の毛ころも

此詞合者於

後鳥羽院御遠所隠岐島

御閑居之間定給云々

御点

左 十八首

右 十七首

合三十五首

〔注〕

(1) 「是は後に有。」以下「いとせめて」の歌の次の「きるとも有。」の部分までは、次の二十六番右歌の注である。

(2) 「長く」は「乱れ」と書かれた上に重ね書きされている。

〔付記一〕本稿は昭和五八年の拙稿執筆に先立って調査したデータを紹介したに過ぎないものである。ただし、今回発表するに際し再度検討を加え、調査と判断に誤りのないことを期した。その作業の中で、他の注釈類と再度読み比べる機会を持ち得たので、本注釈の性格につき、さらなる検討を加えた後に論じてみたいと思う。

松井氏は「解題」で、「加注者は三河国の出身者であったのかも知れない」という判断を下され、それは天理本に見える「珍しい用字」のうち、「夕評の「評（ナギ）」は極めて珍しく」、「大漢和辞典」に「三河国の地名に「評野」があると記す」ことによるという。推測は自由だが、「夕評」は和歌本文の表記であり（解題文中その表記の所在を「三八・左注」と示すが、それも「三八・左歌」の誤りである。またもう一例「評たる」とある表記も四十九番左の和歌本文のものである）、本文の書写者と加注者が同一であることの証明がない以上、推測自体意味をなさない。そもそもその「解題」自体も何を説こうとされたものか不分明であった。まとめの一文は次のように記されている。

『定家家隆詞歌』^(マ)の資料的価値については、安井久善氏の「和歌史的にみてそれほど価値の高い文献ではないが、後鳥羽院の両卿撰歌合の評注を試みる歌人もあったと云ふ点に意義があった」との見方もあるが、さらには複数の種類の注釈本が伝わっていることから、定家家隆両卿の秀歌を通しての新古今歌受容という点で格好の資料ではなかったと考える。

この文は何度読んでも趣旨が理解できない。おそらく末尾部分に脱字があるのであろう。

さような論に拘泥するつもりはないが、少なくとも「解題と翻刻」と称する以上、学問的な検討を経て公表することを希望する。さらに公表には相応の責任が伴うことも自覚されたい。

〔付記二〕誤刻は誰にでもあり得、誤植も印刷物の宿命で、防ぐのはなかなか困難なことである。稿者が担当した新編国歌大観第五巻の本撰歌合の解題は、冒頭に「後鳥羽院が隠岐配流後に定家・家隆の歌各五〇首を撰び、結番した撰歌合」と述べ、書籍版ではそのように表記されている。ところが、このたび本稿を執筆するに当たり、CD-ROM版の解題を参照すると、「定家・家隆の歌各五〇首を撰び」の部分に、「定家・家隆の歌合五〇首を撰び」と、「各」が「合」に変換されてしまっていた。かような不本意はしばしばあり、これはご愛嬌に属しよう。ともあれ、ミスを犯しやすい自らへの戒めを込め、正確を期そうとする態度の重要性を改めて肝に銘じたい。

〔付記三〕欄筆に当たり、貴重書の翻刻を御許可下さった天理大学附属天理図書館に篤く御礼を申し上げます。